

強撚着尺地の力学的性質および風合いの経時変化

○小松かおり* 松生 勝** 丹羽雅子**

(*奈良女大・院、**奈良女大)

目的 和服は特有の衣服構造を持ち、長年にわたり着用、収納保存される伝統衣服である。これらの和服素材については、1975年より広範に多数収集され、それらの力学的性質や、風合いの特徴がすでに明らかにされている。本研究では、その後保存されている後染着尺地用絹織物(131種)を試料とし、25年経過後の現時点での力学的性質を計測し、保存中の経時変化について考察する。

方法 1975年より力学量計測および手触り風合い評価の後、標準状態の温湿度条件下(20℃、65%RH)で保存されている強撚着尺地(131種)を試料とした。品種別内訳は、一越ちりめん(47種)、古代ちりめん(7種)、綸子ちりめん(37種)、無地意匠ちりめん(40種)である。現時点での力学的性質は、KES-FBおよびKESFB-AUTOシステムを用いて、1975年と1981年の計測時と同一条件で計測した。

結果 25年保存後の後染強撚着尺地の経糸方向と緯糸方向の収縮率は、品種毎に特有の伸縮挙動が認められた。引張り、曲げ、せん断、圧縮の基本変形特性のすべてに塑性成分の減少傾向が認められ、それらは織物を構成する経糸と緯糸の交差圧の減少、繊維間摩擦の減少に起因するものと考えられる。これらの基本力学量の変化から風合い値を算出した結果、“KOSHI”、“HARI”は小さくなり、“SHINAYAKASA”の増すことが明らかになった。また、基本変形における応力緩和挙動の測定から、収縮率の大きい布は小さい布よりも緩和しやすい傾向が認められ、寸法変化予測の一知見を得た。